

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 KABARA Thomas John

論 文 題 目

Making Interlingual Meaning: Japanese Subtitles in English-Language Narrative Film

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 藤木 秀朗

委員 名古屋大学 教授 田中 智之

委員 名古屋大学 准教授 小川 翔太

委員 群馬県立女子大学 准教授 木下 耕介

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論文は、アメリカの物語映画に対する日本語字幕がどのような役割を果たし、どのように意味創造に関わっているのかを論じたものである。申請者は、映像研究、認知研究、翻訳研究における従来の知見を批判的に検討しつつ、日本語字幕が単に元の映画作品の物語理解に役立つだけでなく、日本語話者の文化的背景をもとに独自の意味やニュアンスを帯びるような解釈をも促す場合があることを論証している。

本論文は、2つの部からなる本論に、序章と結論を加えた全8章により構成されている。第2・3章からなる第1部では映像研究、認知研究、翻訳研究における字幕の先行研究と日本語字幕の制度について検証し、第4～7章からなる第2部では意味とニュアンスを拡張する字幕の機能に注目し、それを3つの映画作品を事例に考察している。より具体的には、第I部第2章では、認知研究とアイトラッキング研究を参照しながら、映画視聴者は字幕付き作品を観る場合、視覚映像と音声によって統合された物語を追う以前に字幕に注意を払う傾向があるというように、字幕のない作品を観る場合よりもより流動的に視線を動かすことを指摘しつつ、字幕は視聴者の受身的な情報理解だけでなく、能動的な推論活動にも作用していることを明らかにしている。第3章では、映画翻訳家協会を中心にした日本における外国語映画の日本語による主流の字幕制作が、字幕制作者の名声や、(元のテキストへの忠実度よりも)日本語としての明快さを原則に制度化されてきている歴史的状況を、ファンサブと呼ばれるアマチュアの字幕制作が発達している欧米や中国の状況と比較しつつ、浮かび上がらせている。第II部第4章では、文学の翻訳研究の知見を応用しながら、上記の主流の日本語字幕制作とは異なる実践に注目しつつ、その日本語字幕が、意味やニュアンスの欠落につながっているのではなく、むしろ視聴者の推論活動に作用する過程で意味やニュアンスの成長を促している場合があることを、意味論と詩学の観点から論じている。この見解に基づき、続く3つの章では字幕によるニュアンスの成長に関して具体的な事例研究を行なっている。第5章では、『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』（2008年日本公開）の日本語字幕を分析し、字幕化に常に付きまとう字数制限という制約を逆手にとって、日本語字幕が、あえてカタカナを使用したり省略をしたりする戦略により日本語話者の文化的背景を基にした解釈を促す場合があることを示している。第6章では、『ブリッジ・オブ・スパイ』（2016年日本公開）を事例に取り上げ、ふりがなを駆逐することで共示的な意味を示唆するような「カセット効果」と呼ばれる方法を考察している。第7章では、『ペンタゴン・ペーパーズ／最高機密文書』（2018年日本公開）を例に、クオテーションマークを使用するなどして意味を凝縮して伝え視聴者の推論を促す工夫を検討している。最後に、結論では、日本語字幕は一方的な意味伝達の手段ではなく、常に、映画、字幕、日本語話者視聴者の間の交渉関係を伴っていることを強調している。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

映画字幕に関する従来の研究は、欧米の映画と言語の考察が大半を占め、日本語字幕の学術的研究はわずかであった。また、映画字幕は、言語と非言語の関係を含む興味深い研究課題であるにも関わらず、翻訳研究というより広い学術領域においても、これまで必ずしも精力的に研究が行われてきたわけではなかった。先行研究が少ないという状況は映像学の分野においても同様である。こうした全般的な研究状況に鑑みて、本論文は貴重な先駆的な研究となっている。加えて本論文は、映像研究、認知研究、翻訳研究の成果を批判的に検証しつつそれらを方法論的観点として取り入れながら、アメリカの物語映画の日本語字幕を具体的・実証的に分析することで、とりわけ次の4点で重要な知見をもたらしているものとして評価できる。

第1に、従来の字幕研究が、字幕を通じた翻訳により元の映画の意味が失われてしまう側面に注目しがちだったのに対して、本論文は字幕の翻訳プロセスの技巧により新たな意味やニュアンスが創造される面を照らし出すことに成功している。例えば、日本語字幕の研究として稀有の書であり、またそれ故にもっとも権威のある書と目されてきたマーク・ノーネスの *Cinema Babel: Translating Global Cinema* (2007)は、日本語字幕によって元々の外国映画の意味が日本語やその文化的背景に合わせて日本化されていることを批判的に論じる傾向が強かった。それに対して、本論文は、日本語や日本語話者のもつ文化的な背景を考慮に入れて、字幕の技巧と映画視聴者の推論活動の関係を創造的なプロセスとして明らかにしている。このことと関連して第2に、従来の研究は字幕に対する映画視聴者の受容を受身的なものとして想定しがちだったのに対して、本論文は、意味とニュアンスの拡張を論じた文学の翻訳論を発展させるとともに、アイトラッキング研究や認知研究を取り入れながら、映画視聴者を情報理解と推論活動の能動的な主体として捉え直している。第3に、本論文は、日本語字幕の技法と映画視聴者の能動的な推論活動との関係性が、単一的・一方向的なものではなく、多様でダイナミックなものであることを明らかにしている点でも評価できる。そして第4に、本論文は、日本語字幕制作の特徴を、単に言語レベルの問題としてだけでなく、プロとアマチュアの関係も踏まえながら、字幕制作の歴史的制度化の問題とも関連付けながら論じている点で、多角的で広い視野をもつ研究ともなっている。

とはいえ、本論文にも瑕疵がないわけではない。例えば、アイトラッキングをはじめ視聴者の推論活動に関する見解は、先行研究の実験結果や理論に依拠し、自ら実験を行うまでには至っていない。このことはまた、欧米で行われた欧米語の字幕をもとにした実験に依拠しながら日本語字幕を論じるという論理的捩れにもつながっている。

しかしながら、こうした問題は今後の課題として十分に克服していくことが期待できるものであり、本論文全体の価値を損なうものではない。以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。